抑うつ傾向と虚記憶の関係 (2)

—再認テストと Remember/Know 判断を用いた検討—

○丹藤克也¹・杉山崇²

(¹愛知淑徳大学・²神奈川大学)

キーワード: 抑うつ, 虚記憶, Remember/Know 判断

Effects of depression on true and false memory in the DRM paradigm. part II.

Katsuya TANDOH¹, Takashi SUGIYAMA²

(¹Department of Psychology, Aichi Shukutoku Univ, ²Faculty of Human Sciences, Kanagawa Univ.)

Key Words: depression, false memory, Remember/Know procedure

目 的

抑うつに関するこれまでの記憶研究では、主に正確な記憶の再生量に焦点があてられており、抑うつと虚記憶の関係を検討した研究は少ない。その中でも、実際には提示されていない単語（クリティカル語）の虚記憶を高い確率で誘発する DRM パラダイムを用いて抑うつ者の虚記憶を検討した研究では、抑うつ群においてネガティブ語や抑うつ関連語の虚記憶が増加することが報告されている（e.g., Howe & Malone, 2011; Joorman et al., 2009）。しかし、DRM パラダイムを用いた先行研究の多くが臨床群を対象としており、アナログ研究はほとんど行われていない（e.g., Stea et al., 2013; 丹藤, 2013）。抑うつに連続性を仮定するなら、抑うつ傾向の高い非臨床群を対象とした検討から、抑うつ者の記憶過程に関して有益な示唆が得られるものと考えられる。

そこで、本研究では非臨床群で抑うつ傾向が高い者を対象としたアナログ研究を行い、臨床群の抑うつ者と同様にネガティブ情報の虚記憶が増加するのか、また抑うつによって、意識的回想と熟知性という記憶過程のいずれが影響を受けるのかについて Remember/Know 手続きを用いて検討する。抑うつ者では記憶の抽象化・概括化や意識的回想の低下が起こるなど、想起の具体性に乏しいことが指摘されている（Raes et al., 2006; Ramponi et al., 2004）。そのため、抑うつ傾向が高くなるほど意図的回想の指標である Remember 反応が低下し、これに伴って虚記憶は増加することが予想される。

方 法

実験参加者: 大学生 143 名が参加した（男性 31 名, 女性 112 名, 平均年齢 19.2±2.9）。

刺激: 高橋（2001）の情動価を考慮した基準表から 12 個の虚記憶リストを使用した。クリティカル語が不快語、快語、中性語のリストを各 4 リストずつ使用した。そのうち半数のリストを学習リスト、残りの半数を再認テストで未学習リストとして使用した。各リストは提示されないクリティカル語を連想させる 15 項目で構成された。リスト項目はひらがな表記とし、プロジェクトで視覚提示した。集団で実施したために、リストの提示順序はランダムな系列を 1 つ作成して全員が同じ順序で学習した。再認テストでは全部で 60 項目を提示した（学習語 24 項目, 未学習語 24 項目, 学習リストのクリティカル語 6 項目, 未学習リストのクリティカル語 6 項目）。

手続き: 実験は集団で実施した。まず抑うつ傾向を測定するために自己記入式の抑うつ尺度である日本語版 SDS（福田・小林, 1973）および CES-D（島・鹿野・北村・浅井, 1985）を実施した。その後、虚記憶リストを視覚提示し、偶発学習を求めた。方向付け課題として、各リストの項目に対して単語の具象性を 5 段階で評定するよう求めた。リスト項目は 5 秒間提示され、ISI は 1 秒であった。すべてのリストを提示した直後に再認テストを実施した。再認テストは各自のペースで実施し、用紙に記載された単語に対して Old/New 判断および Remember/Know 判断を求めた。

結 果

抑うつ尺度と学習語の正再生率および Remember 反応率との相関係数を Table 1 に、抑うつ尺度とクリティカル語の虚再生率および Remember 反応率との相関係数を Table 2 に示す。SDS については、いずれの記憶指標とも有意な相関は認められなかった。CES-D では快語リストの正再生率と有意な負の相関（ $r = -.18, p < .05$ ）が認められ、抑うつ傾向が高いほど快語リストの正再生率は低かった。不快語リストの再生においても負の相関（ $r = -.14, p < .10$ ）が有意な傾向にあった。学習時に未提示であったクリティカル語の虚再生については、中性語リストでのみ抑うつ傾向が高いほど、虚再生率が高くなる傾向が認められた（ $r = .15, p < .10$ ）。Remember 反応率では、正再生、虚再生ともに中性語リストの Remember 反応と正の相関が有意な傾向にあり、抑うつ傾向が高いほど、Remember 反応が増加する傾向にあった。

考 察

抑うつ傾向が高いほど虚再認が増加する傾向が中性語リストでみられたが、快語・不快語リストでは虚再認は増加しなかった。その原因として、中性語リストと比べ、情動語リストの虚再認率が高く、天井効果が見られた可能性が考えられる（中性で 0.43, 不快で 0.73, 快で 0.80）。また、抑うつ傾向が高い者であっても Remember 反応は低下せず、むしろ中性語リストでは、抑うつ傾向が高いほど Remember 反応率も高い傾向にあった。このため、意識的回想や具体的想起の低下によって虚再認が増加するという仮説は支持されなかった。本研究では 2 つの抑うつ尺度を用いたが、尺度によって有意な相関が得られるかに違いがあった。今後はさらに、認知的症状を重視した抑うつ尺度である BDI-II を用いて、抑うつと虚記憶の関係を検討することが必要であろう。

Table1 学習語の再生率およびRemember反応率と抑うつ尺度の相関 (N=143)

	正再生率			Remember反応率		
	中性語	快語	不快語	中性語	快語	不快語
SDS	-.02	-.09	-.10	.04	.02	-.03
CES-D	-.01	-.18*	-.14†	.14†	.13	.11

* $p < .05$, † $p < .10$

Table2 クリティカル語の虚再生率およびRemember反応率と抑うつ尺度の相関 (N=143)

	虚再生率			Remember反応率		
	中性語	快語	不快語	中性語	快語	不快語
SDS	.12	.05	.08	.06	-.00	-.01
CES-D	.15†	.01	.00	.15†	.05	.10

* $p < .05$, † $p < .10$

本研究は科学研究費（課題番号 24653200, 代表: 杉山崇）の助成を受けて行われた。